園のくらしを育む 3

幼児とアート（1）ーアート経験を支える居方ー

秋田喜代美

1　アートする経験

「アートを経験する時、私たちは経験している内容を能動的に解釈することにかかわっている。探索的にみることを刺激し、知覚を研ぎ澄ませ、ビジュアルインテリジェンスを喚起する」(Goodman, 1976)[注1]。これは、私の好きなNelson Goodmanの言葉です。子どもの知的さを大人は子どもの語る言葉や出合う言葉の経験とつないでとらえがちです。ですから、Aちゃんの行為そのものよりも、こう語ったということを知的なことの現れとしてとらえたり、言葉でさまざまなことを教えようとしたりすることが多くなるといえるでしょう。

しかしどの子も、言語的なインテリジェンスだけではなく、直観的に美しいと感じたり、直観的によいと感じたりするビジュアルな感覚をもっています。また、何か言葉ではなくさまざまな動きとその痕跡で表現してしまいたい欲求や、そのほうがぴったりくる感覚を

子どもはもっていると思います。そこに、その子の根源的な存在としての表現欲求があります。大人がそれをどう受け止め、そしてさらにそれをどのように意味づけ価値づけられるかが重要ではないかと思います。それが、子どもが「知覚を広げ、新たなつながりと対比をもたらし、経験を構造化したりしながら、新たな世界を創り出したり、また見直したりしていく」(Greene, 2001)[注2] ことにつながっていくからです。

善悪ではなく、美しい、端正である、整っているなどの、あるまとまりのよさや、それに対して自分という存在の介入によって意図的に壊してみたいという思いや、子ども自身も自覚化できていない感情につき動かされて、動き出す行為の意味に大人が向き合うこと。これが、すでにもっていた見方を越えて、子どもと真に出会える瞬間であり、わかっているつもりの子どもをもっとわかろうと問い始められる時になります。そしてそのことは、保育者がどのように言葉をかけ働きかけるかという議論以前の、子どもを感じ、子どもと共にいる居方を示してくれるようにも思います。子どものアートの経験を意識することは、子どもの新たな可能性の発見につながり、日々の保育に違う視座を示してくれます。それは描画、造形、音楽という境界区分で活動を見るのではなく、アートとしての経験であることが大事でしょう。

2　保育者の居方

私が毎年研修に入れていただいている林間のぞみ幼稚園（神奈川県）のベテランの保育

者が、故大場牧夫先生の実践から学んだこととして私にお話ししてくださった印象深いエピソードがあります。みんなで花火を見てきた時に、「昨日見てきた花火を描きなさい」と言うのではなく、黒い画用紙を配って「君たちに夜の空をあげるよ」という言葉を咄嗟に言われたそうです。また、みんなで育てた花の種を付けて風船を飛ばした時に、そのことを思い出して描こうとした子どもに「青い空をあげるね」と言いながら、青い画用紙を出してこられたそうです。素材を子どもたちに手渡す時から、その子どもの想像の世界に子どもの目線で入れる保育者の感性に、私は心動かされました。

初夏に、その幼稚園の園庭では、ベニヤ板を立ててそこに貼られた紙に自由に塗りたくりをしていました。子どもたちは黄色一色で、筆で好きにいろいろ塗りたくっています。ある程度やりますと、中には紙が真黄色になりつまらなくなってきて、今度は垂れてきた絵の具が土と混ざることがおもしろくなる子どももいました。その時に保育者はどうかかわるのかなあと思って見せてもらっていました。「おばけが飛んできたよ」と担任保育者がそこに一本青い線を入れました。それが子どもにとっておばけに見えるかどうかはわからないのですが、その途端に子どもたちの動きは変わりました。そこに、子どもの表現や物語の世界を広げてくれる保育者と、「遊ぶんじゃありません」と統制的になる保育者との違いがあるのではないかなと感じました。その時子どもたちは、一枚目は単に紙に色を塗っているという素材との対話を楽しむだけでした。たいがいの実践ならば、この一枚の用意された紙で塗りたくりは終わりです。けれども、そこではもうちょっとやろうと、保育者

がその一枚をはがしてまた新しい真っ白の紙をそこに貼りました。二枚目になると、子どもたちの中に表現したいものへの計画性が出てきました。

一枚目は「好きにやっていいのよ」と言われて好きに塗りたくって、まずはものや表現の媒体がどういうものであるのかという感覚を子どもたちは楽しんでいました。その活動をある程度やり切った時に、今度はどんなものを描きたいのかということが子どもの中から出てくるプロセスがありました。二枚目を準備するという、表現の生まれる過程への保育者の見通しと共に、まずはその前に十二分に子どもが素材とかかわり、塗る技を子どもなりに十二分に経験できる環境を準備し、傍らで見守ることが保育者にできるかが、「アート経験」になるのか、「塗りたくり」活動なのかの分岐点なのではないかと感じた瞬間でした。この用意すべき紙は、いつも二枚で終わりとは限りません。むしろ何枚も何枚も要求されることもあるでしょう。あるいは、ほんの少しで、全部終わらなくてももう十分となることもあるでしょう。同行者として居るとは何か、それを子どもから問われるのが、アートの経験ではないでしょうか。

（東京大学大学院教授）

注

1 N. Goodman, *Languages of Art* (Indianopolis, Hackett, 1968; 1976)

2 M. Greene, *Variations on a blue guitar: The Lincoln Center Institute lectures on aesthetic education*. (New York: Teachers College Press, 2001)